



山本組合総合病院

小児科 上村 直哉



予防接種・ワクチンについて (2)

ワクチンの同時接種について

アメリカのデータでは乳幼児用肺炎球菌ワクチンとヒブワクチンの二つを接種することにより、肺炎球菌とインフルエンザ菌による細菌性髄膜炎の死亡が20分の1以下に減少しました。日本でこれらの髄膜炎で亡くなる子どもは年間50〜100人です。ワクチン接種の徹底で最大100人の子どもの命が助かる可能性があります。そのためには、決められたスケジュール通りに、両ワクチン接種するため複数のワクチンを同時に接種する事が、どうしても必要になってきます。

一方、今年3月からの4ヶ月で、ワクチン同時接種後に死亡が報告されたのは8例で、いずれもワクチン接種との因果関係は不明で、乳幼児突然死症候群による死亡とされました。日本の乳児死亡数は年間約3000人で、約150人が乳幼児突然死症候群とされています。同時接種の安全性を議論するためには、今後の乳幼児死亡数の推移と、その

中での乳幼児突然死症候群、細菌性髄膜炎による死亡数の変化を、総合的に検討する必要があります。

乳幼児用肺炎球菌ワクチンでは、接種後20〜30%に一時的な発熱や接種部位の腫脹が見られますが、重い副作用はないと考えられます。ヒブワクチンも同様です。

安全なワクチンと言えども、同時に何種も接種することは、体の免疫応答に過剰な反応を引き起こす可能性があります。まして作用増強のための添加物であるアジュバンドを含むワクチンを同時に接種すれば、添加物に対する過剰反応の可能性もあります。同時接種を行う場合は、アジュバンドを含まないヒブワクチンと含む三種混合ワクチン、またはアジュバンドを含まないヒブワクチンと含む乳幼児用肺炎球菌ワクチンの同時接種の方が、三つを同時に接種したり、三種混合ワクチンと肺炎球菌ワクチンを同時接種するより、副反応が少ないのではないかと思っています。

専門家検討会では

1) 小児肺炎球菌ワクチンとヒブワクチンは、同時接種により短期間に効率的に予防効果を獲得できるメリットが期待されると同時に、単独接種が可能であることを示した上で、同時接種を行う場合には、その必要性を医師が判断し、保護者の同意を得て行う。

2) 重篤な基礎疾患のある乳幼児については、状態を確認して慎重に接種する。その際、単独接種も考慮しつつ、同時接種が必要な場合には、医師の判断により行う。

実際に接種する現場で判断するよう提言しています。

